

※日本陸軍の『暴れ馬』

いつの時代でも強烈な個性を發揮して人氣を博し、同時に乱暴癖と気性の激しきから、やたら周りの者と衝突して敵をつくつてしまう人物がいるものだ。それが巷の住人であれば、少々ハメをはずそうだが、限度さえ越さなければ愛嬌として見過ごされることもあるう。

しかし、巨大な軍事機構の一角に席を占め、多くの部下に命令する立場にあり、大軍を動かす作戦計画の立案者となれば、話は違ってくる。沖繩戦の終結を待たず、沖繩の第三二軍参謀長として、軍司令官・牛島満中将とともに自決して果てた長勇中将は、そういうタイプの軍人であった。

長は、とにかく喧嘩っ早いことで知られていた。大柄な体躯と剣道五段の腕前、それに柔道や相撲もたしなむという長は、宴席で酔いにまかせて同僚と争い、時には上官まで殴つたという。また、現役の将校であることも忘れ、ヤクザと大乱闘を演じ、後々まで残る大怪我を負つたこともあった。

この日本陸軍にあって屈指の『暴れ馬』であった長は、陸軍がその武力を背景に政治の舞台に躍り出て、民間の右翼運動と手を結びながら、昭和ファシズムの先導役になつて

いった時代状況に巧みに便乗した、典型的な軍ファシストでもあった。日本陸軍が権力の中枢に接近し、軍部内閣を組織して軍部主導の国内政治態勢をつくりあげていくためには、長のような「暴れ馬」も必要としたのである。まさにこの時代は、テロによる威嚇という「暴力」が幅を利かした時代であった。

陸軍大学校出身の革新将校グループは、東条英機の章でも述べたように、第一次世界大戦で証明された国家総力戦論に触発され、それまで軍事領域だけしか関心を持たなかった軍人の姿勢を改め、政治・経済領域へも関心を向け始める。彼らは、国家総力戦を戦い抜く国防体制の建設をめざし、公然と政治結社を組織していく。

満蒙問題への関心が深かった「双葉会」、国防問題を主な研究対象とした「木曜会」がその先駆であった。メンバーは相互に重複しており、両会は一九二九（昭和四）年五月に合流して「一夕会」を結成する。同会は、陸軍人事の刷新や満蒙問題の早期解決を訴え、広く同志を集めていく。「一夕会」のメンバーは、主に少佐・中佐など佐官クラスで占められていた。

つづいて、一九三〇（昭和五）年九月に、中尉・大尉など尉官クラスを中心とする「桜会」が結成される。この会の中心人物は、参謀本部第二部（情報担当）のロシア班長・橋本欣五郎少佐である。

橋本は、活発な同志獲得工作をすすめるが、これに応えて入会し、以後、橋本の片腕として最も熱心に国家改造運動に参加するのが、当時参謀本部第二部の支那課員だった長勇大尉である。「桜会」は、軍部の存在と根本的にあいられない政党政治を排撃し、必要ならば武力を使っても国家改造を図り、軍部を中心とする国防国家の建設を目標にかかげていた。

長は、「桜会」の拡大のため陸軍大学校で会員勧誘運動を行なったり、尉官級を中心とする「小桜会」の結成に動くなど目立った活動をつづけ、ますます国家改造運動にのめり込んでいく。こうした橋本・長らの運動がやがて、満州事変（一九三一年九月一八日）後に国内でクーデタを敢行し、軍部内閣を誕生させて一挙に国家改造を断行しようとする計画につながっていくのである。

※「下剋上」を地で行った男

では、長勇とはいったいどのような人物であつたらうか。長は、黒田藩の城下町、福岡に生まれ、陸軍士官学校生徒時代から、福岡に根を下ろしていた国粋主義団体・玄洋社の頭山満や内田良平の影響を受ける。長は、頭山らから、中国大陆が日本の運命を握る枢要な地であり、日本の発展はこの大陸政策の展開にかかっていることを徹底して教え込まれ

た。長の狂言的ともいえる膨張主義とナショナリズムは、すでに陸士時代にそうした環境ではぐくまれたと見るべきであろう。

インド哲学者で、長らと親交があり、国家改造運動や民間の右翼運動の理論的指導者であったことから、東京裁判でA級戦犯に指名された大川周明は、長を評して、「無鉄砲で大胆であり、また愛すべき稚氣もあったので、その行動は天保銭組（註・陸軍大学校卒業者のこと）としては甚だ異彩を放って居た。ただ軍人としての天稟てんひんがあったので傍若無人に部内を横行闊歩しながらも、能く中將まで昇進した」（大川周明「長中將第一三回忌法要記」と記している。

大川は長との関係から、好意的な評価を行なっているが、そこには、長が既成の枠内にとらわれず、陸軍の内外で縦横に動きまわり、軍ファシズム運動に精力を注いだ様子が知れる。当時、軍内部では、いわゆる「下剋上」と評される状況が蔓延しており、軍を動かす推進力は、佐官級あるいは尉官級にまで下降していた。長は、その意味で「下剋上」の風潮を代表する軍人であったのだ。

大川はつづけて、「もし半途陸軍を逐おわれて身を市井無頼の徒に投じたとしても、屹度きつど当代無双の大親分となり、豪俠の名を天下に謳うたわれる」ことになったであろう、と付け加えている。事実、長は、大陸浪人なども含め、この手の方面とも交際があり、取り巻き連

のなかには俠客がいたとされる。

本来なら、上下の階級を基軸とするヒエラルヒーが厳然として存在する軍隊組織にあって、いくら「下剋上」の時代とはいえ、長のように度を越した人物は、それだけで失格者となるか追放されるかであった。ましてや身もとの不確かな連中との交際は、軍人としての職分からは逸脱したものとして咎められるはずだ。

事実、この大川の評価を裏付ける証言がある。中学から陸軍士官学校まで長とずっといっしょだった馬奈木敬信（終戦時第二師団長・中将）は、当時陸軍省人事局長であった富永恭次少将に呼ばれ、「長が軍内部でひとり力みかえるのはいいが、民間の俠客風の子分を連れているのはよくない。軍の団結、融和に影響されるので、それだけは止めるよう注意してくれ」と依頼されたという。富永からそう言われた馬奈木は、長に注意を与えたが、しかし長は、「おれは民間人を引き連れているも、一つとして軍に迷惑をかけた覚えはない。よけいなお世話だ」と言って注意を聞かなかったという（中村菊男『昭和陸軍秘史』）。

上官の注意をも意に介さず、非妥協的で直情的なタイプの典型であった長の性格は、のちに沖縄戦での作戦にマイナスの形となって表われる。

※未発クーデタの首謀者

陸大卒業後、隊付をへて長は、参謀本部の情報畑を歩むことになり、支那課に籍を置きながら中国各地に駐在経験を積むなかで、ひとかどの「支那通」となっていく。

支那課に籍を置く課員はほとんど例外なく、大陸政策については積極政策の支持者であり、外交によって中国の權益を獲得していくよりも、武力行使による中国植民地化の方法を得策と考えていた。満州事変後においては、その成果をもとに即時「満州国」の建設と、そこを拠点とする中国華北地方への侵攻計画の承認を迫ることになる。事実、同年の三月事件について発覚した一〇月事件には、支那課員のほとんどが何らかの形でかかわっていた。長が「桜会」に参加して、このクーデタ計画に深くかかわるのも、満州事変を機会に宿願の中国の植民地化政策の推進を一挙に進めたいという野心から出たものであった。一〇月事件において、長はその「主役」として暗躍する。

満州事件発生当時、長は任地の北平に駐在していたが、これに呼応して計画の実行に移ろうとしていた橋本からの電報により、無断で職場を放棄し、軍服を私服に着替えてひそかに帰国する。東京に戻った長は、築地の待合に潜伏し、決行の準備をすすめた。

クーデタ計画は、同志一八〇〇名をもって決起し、政党や財界の指導者を襲撃して暗殺、その混乱に乗じて軍隊を出動させ、戒厳令下に軍部内閣を組織し、一挙に国家改造計画を推進するというシナリオであった。そのなかで長は、一個中隊を率いて閣議開催中の

首相官邸を襲撃・占拠し、閣僚を血祭りにあげる役割をになうことになっていた。そして、このクーデタが成功していれば、長は橋本と並ぶ中心人物として、荒木貞夫大将を首相兼陸軍大臣、橋本を内務大臣、建川美次少将を外務大臣とする内閣に、警視總監として加わる予定であった。

帰国後、長は「桜会」参加者にクーデタ決起をうながし、血判状までとって、最後まで即時断行を強硬に訴える。しかし、このクーデタ計画は未然に軍首脳の間知るところとなり、首相兼陸軍大臣に予定されていた荒木大将は、計画の中止勧告に乗り出した。

荒木は、潜伏していた長を自ら訪ねる。荒木の勧告に対し、長は、満州事変の進行を円滑にすすめること、ロンドン海軍軍縮会議における統帥権干犯問題以来いちだんと敵対心を強めていた若槻民政党内閣の総辞職を、中止の条件として出した。これを受けて荒木は、計画の主旨の完全な実現を約束して、長らの手を引かせることに成功する。

長は憲兵隊によって拘束され、結局、重謹慎二〇日の行政処分を受けることになった。しかし、それは、まったく形ばかりのものに過ぎなかった。未遂に終わったとはいえ、陸軍刑法からすれば、このクーデタ計画が反乱予備罪に該当することは明白である。にもかかわらず、軍法会議にもかけられなかったし、予備役に編入されることもなかった。これでは、事実上、長らの計画を是とし、軍人の政治関与を承認したことに等しい。

この処分の軽さは、裏を返せば、軍首脳のなかに長らの支持者が相当数いたことを暗に示すものであった。処分の内容次第では、軍内部が分裂する状況にあったともいえる。事実、「桜会」のメンバーであった土橋勇逸の手記には、陸軍省軍務局長・小磯国昭（後の首相）が、杉山陸軍次官を中心に計画への対応を協議したとき、「思いきって決行させてみてはどうか」（高橋正衛『二・二六事件』）と発言したと記している。もちろん、長はそうした軍内部の実情を熟知しており、それがクーデタ計画実行への原動力ともなっていたのである。

しかし、この事件が当時の政界に与えた衝撃はけっして小さくなかった。一部の急進派将校の動きとはいえ、テロによって政党内閣を排除しようとする考えが軍部に存在したことは、政治家たちにとって脅威であった。しかも、事件後、橋本・長ら事件首謀者への扱いがきわめて寛大であったことも、軍首脳が橋本らの運動を事実上容認していたことを示すものとして、危機感を呼び起こすに十分であった。この危機感は、翌年の海軍の青年将校による犬養毅首相の射殺事件（五・一五事件）となって現実のものとなる。

※南京虐殺を煽動

一九三七（昭和一二）年七月七日、盧溝橋事件により日中全面戦争が開始され、まもな

く戦火は上海へと拡大した。柳川平助中将率いる第一〇軍隷下の部隊が上海に上陸するが、中国民衆の支援に支えられた中国軍の激しい抵抗に遭遇する。予想に反して、日本軍は多大の出血を強いられることになり、増援に継ぐ増援の結果、ようやく日本軍は首都・南京に迫り、これを占領した。このとき、戦後、東京裁判で明らかとなる南京虐殺事件が起きる。それは、洞富雄ほとむ氏らの研究によれば、約二〇万人にのぼる中国人捕虜と南京市民を、日本軍が無差別に殺害したものであった。

日本が南京に迫っているとき、北京からやや南の天津に駐在していた長は、中支那方面軍参謀（上海派遣軍参謀を兼任）として、大虐殺の現場となる南京へ向かう。南京虐殺事件の直接の原因は、上海戦線で予想外の出血を強いられた日本軍人の、中国人への憎悪・復讐心の産物であり、日清戦争以来日本人のなかにつちかわれてきた中国人蔑視の表われであった。あわせて、日本軍の非人間的な体質や軍紀の乱れなども指摘される。

しかし、大量の虐殺を短期間に行なった背景には、それ以上の問題として、日本軍の組織的犯行としての側面を無視することはできない。捕虜の收容を放棄した各部隊が、中国人捕虜に対する集団虐殺命令によって、数千の単位で次々と「処理」を断行し、各地に死体の山を築いていた経緯は、洞富雄『決定版 南京大虐殺』（現代史出版会）、藤原彰『南京大虐殺』（岩波書店）、吉田裕『天皇の軍隊と南京事件』（青木書店）など最近の研究で

明らかになっている。南京虐殺事件は、日本軍の組織的犯罪であり、国家による残酷なテロ行為であったのだ。

こうした事実を証明する一例として、長参謀の南京での行動についての証言がある。陸軍将校の国家改造運動を資金面で支え、長とも懇意な関係にあった徳川義親が、その著書『最後の殿様』（講談社）のなかで、友人の藤田勇が長から聞いた話として次の話を書き残しているのである。

それは――「日本軍に包囲された南京城の一方から揚子江沿いに女、子どもをまじえた市民の大軍が怒濤のように逃げていく。そのなかに多数の中国兵がまぎれこんでいる。中国兵をそのまま逃がしたのでは、あとで戦力に影響する。そこで、前線で機関銃をすえている兵士に長中佐は、あれを撃て、と命令した。中国兵がまぎれているとはいえ、逃げているのは市民であるから、兵士はさすがにちゅうちょして撃たなかった。それで長中佐は激怒して、『人を殺すのはこうするんじゃない』と、軍刀でその兵士を袈裟がけに切り殺した。おどろいたほかの兵隊が、いっせいに機関銃を発射し、大殺戮となったという」というものであった。この話を自慢気に話す長に、藤田は驚いて、「長、その話だけはだれにもするなよ」と念を押したという。

しかも、長は、同様の話を、もう一人に言い残している。同事件が発生した翌（一九三

八)年の三月、長は中支那方面軍參謀から第一九師団歩兵第七連隊長(朝鮮咸興)に転任するが、「校友会」以来の付き合いのあった田中隆吉(同山砲第二五連隊長)に、その地で次のように語ったという。

「南京攻略のときには自分(注・長のこと)は朝香宮の指揮する兵団の情報主任參謀であった。上海付近の戦闘で悪戦苦闘の末に漸く勝利を得て進撃に移り、鎮江付近に進出すると、杭州湾上に上陸した柳川兵団の神速な進出に依って退路を絶たれた約三〇万の中国兵が武器を捨てて我軍に投じた。この多数の捕虜を如何に取り扱うべきやは食料の関係で、一番重大な問題となった。自分は事変当初通州に於て行われた日本人虐殺に対する報復の時期が来たと喜んだ。直ちに何人にも無断で隸下の各部隊に対し、これ等の捕虜をみな殺しにすべしとの命令を發した。自分はこの命令を軍司令官の名を利用して無線電話に依り伝達した。命令の電文は原文は直ちに焼却した。この命令の結果、大量の虐殺が行われた。然し中には逃亡するものもあってみな殺しと言う訳には行かなかつた」(田中隆吉『敗戦秘話 裁かれる歴史』)

田中は、長のこの証言を長一流の大言壮語として、最初はこれをまともには信じなかつたが、後に大量の虐殺事件は軍隊の統制ある集団行為によらなければ絶対不可能であり、それは上司の命令によってのみ実行に移すことができる、との判断を持つようになったと

いう。

藤田・田中の記録は、虐殺の現場が南京城外の下関付近（シャムカ）と南京郊外の鎮江付近（チンヂヤン）との相違はあるが、いくつかの点でほぼ間違いないと考えられる。長が証言した相手は、藤田にせよ田中にせよ、国家改造運動以来の気心の知れた同志であり、多少の誇張はあるものの、ほぼ事実を忌憚なく語っているとったほうが自然である。

たしかに、田中も記しているが、長は「極端に芝居が多く」、中国人捕虜の殺害まで手柄話とする「多分の残酷性」を持っていた人物であったかも知れない。しかし、南京事件の日本軍による組織犯罪が明らかにされている今日、長に代表される人物が現場での判断として、虐殺を何らかの形で指示・命令したことは間違いないであろう。田中は、戦後その記録のなかで、「世界を驚倒せしめた南京の虐殺事件は詮じ来れば長氏一人の独断が生んだ惨劇であった」と結論づけている。

むろん、事件の責任は長一人が負うものでなく、日本軍全体の責任が追及されなければならぬ。しかし、同時に、長のような人物が、事件の発生に深くかかわっていたことを明らかにすることによって、より具体的に事件の真相に迫ることができるはずである。

※沖繩守備軍の参謀長へ

虐殺の責任を何ら問われることなく、長は中国戦線での勤務をへて、朝鮮軍の第七四連隊長、蒙古駐屯の師団参謀長、つづいて北部仏印進駐部隊の参謀長、南方総軍参謀副長、第一〇師団歩兵団長を歴任する。その後、米軍に上陸占領されたサイパン奪回のための逆上陸部隊指揮官にいったんは予定されたが、この案は立ち消えとなり、沖繩諸島に新しく創設された第三二軍の参謀長に就任する。事実上の栄転であった。一九四四（昭和一九）年七月のことである。

第三二軍は、米軍の反撃が本格化するにともない、「絶対国防圏」として設定されたマリアナ諸島の第一線陣地を支援する第二陣地として、南西諸島を作戰担当地域とした。同軍が新設されたのはこの年の三月二二日であるが、当初は大本営の航空決戦第一主義の戦略方針から、航空基地の建設と防衛を主任務とし、地上部隊はわずかに二個混成旅団と一個連隊が予定されていただけであった。しかし、トラック島やマリアナ諸島が陥落すると、大本営は沖繩を本土防衛の第一線とみなすことになった。

こうして、第三二軍は重要部隊となり、兵力も一挙に四個師団と五個混成旅団を基幹とする、一八万人を数える大軍へと変身する。長が沖繩に着任するのは、第三二軍が重要部隊に昇格していく矢先のことであった。しかしここで、大本営と第三二軍とのあいだには、その作戦方針をめぐる基本的な対立が存在していた。すなわち、重要部隊となった

後も、大本営は航空戦力至上主義の構想を捨てず、そのために飛行場建設を優先課題とし、さらには、台湾の航空戦力との共同作戦を強化する意味で、大本営直轄軍から台湾軍（のち第一〇方面軍に昇格）に編入替えを実施する。

これに対して第三二軍は、日本軍の航空戦力の現状や、太平洋諸島における対米戦の教訓から、陸戦第一主義によって米軍に出血を強要し、本土侵攻の企図を一時的にでも遅らせ、本土防衛態勢を強化することを得策と考えていた。とくに第三二軍の高級参謀・八原博道大佐によって構成されたこの作戦方針は、現実的かつ妥当性をもつものとされ、陸戦第一主義は、第三二軍内部で共通の認識とされた。

ところが、その当の第三二軍内部でも、この陸戦第一主義の実行段階で対立が生じることになった。すなわち、八原が洞窟陣地を利用しての徹底した持久戦法の採用を主張したのに対し、長参謀長は状況に応じては攻勢作戦に打って出ることを説いたのである。

この両者の対立は、米軍上陸後しばらく表面化することはなかったものの、戦況が日本軍に不利となり、戦力の消耗が目立ってくると、深刻な対立となって作戦指導の不一致を見せはじめた。その結果、長参謀長の主張する攻勢作戦が日本軍の消耗を早めることになり、沖縄住民の被害をも一段と大きくした。

※敗北を加速した夜襲攻撃

沖繩戦は、一九四五（昭和二〇）年三月二三日からの米軍の慶良間諸島への砲撃を前哨戦として始まる。米軍は、わずか一週間で慶良間諸島を占領し、沖繩本島への攻撃基地を確保する。そして四月一日、沖繩本島中部の読谷海岸よみだへの上陸作戦を開始する。上陸と同時に、米軍は本島の二飛行場を占拠した。

一方、第三二軍は持久作戦から米軍の無血上陸を許す。飛行場喪失の事態を深刻にみた大本営と第一〇方面軍は、持久作戦方針から攻撃をひかえている第三二軍の作戦方針に疑問を抱き、即時米軍への攻撃開始と飛行場の奪回を要求した。

ここから、第三二軍内部では、持久戦堅持の方針に動揺が生じはじめる。なかでも長参謀長は、四月三日に幕僚研究会議を開き、大本営や第一〇方面軍の意向に沿って、持久作戦から攻勢作戦への方針転換を表明した。これに対し、八原高級参謀は、あくまで持久作戦によって米軍への漸次消耗を強いる作戦の合理性を説いた。が、牛島司令官は長参謀長の意見をいれ、攻勢作戦の発動を命令することになる。

攻勢作戦の実施を一貫して主張した長参謀長が説いた、その内容は、少数部隊による夜間の奇襲攻撃を主とするもので、圧倒的な火力網で応戦する米軍の前ではいたずらに兵力

の消耗を重ねるだけとなった。攻勢作戦は、幾度も計画されては、実施と中止が繰り返され、作戦指導の不徹底が目立ってきた。

こうした状況に大きな焦りを隠さなかった長参謀長は、大規模の兵力を投入して攻勢作戦を発動し、局面の打開をはかろうとした。こうして四月一二日の夜間攻撃が敢行されたが、結局、二個大隊相当の兵力を失う結果となった。要するに、長参謀長は、現場の部隊の状況を度外視し、上級司令部の要求に応えて、自分自身の面目を立てるため強引な作戦を指示したといわれても仕方がない。

それは、長期の見通しに立つ作戦指導よりも、目先の戦闘に執着し、米軍の強大な兵力に対抗するに日本軍人の「精神力」に訴えることで、勝機をつかみたいとする、きわめて非合理的な発想からする作戦指導であった。

長参謀長が八原参謀に立案を命じた夜襲計画の骨子には、「夜襲所望の如く成功すれば、これに乘じ、全力をもって攻勢に転じる」とし、一個旅団規模の兵力を投入するとされていた。第三二軍には、訓練も装備も不十分な現地召集の防衛隊員も多く参加している。その兵力が、米軍が待ち構える圧倒的な火力網のなかにただ漫然と突入しても、勝利への成算はどう考えても見出せる状況ではなかった。

この時のことを、長参謀長の作戦構想に危惧を抱きつづけ、持久作戦の徹底を説いてい

た八原参謀は、のちに、「四月八日の全力攻勢を中止した経緯もあり、中央に対する面目もあつての夜襲と思われ、参謀長の心中察するにあまりある」（八原博道『沖繩決戦』）と、好意的に解釈して書き記している。しかし、当時の八原参謀の心境はそう単純なものではなかつたはずである。

執拗な長の攻勢作戦の要求は、五月四日の総攻撃計画によって再び問題化する。総攻撃は、長自身によると、「攻撃戦力を保有している時期に攻撃を採り、運命の打開を策すべきである」との考えから発案されたものであつた。しかし、この時期までに、第三二軍の戦力はあいつぐ夜襲によっていちじるしく低下しており、逆に米軍の攻勢の前に後退をづけていた。長の発案は、こうした日本軍の劣勢を一举に挽回するための、いわば捨て身の作戦であつた。

一方、米軍は自軍の消耗をできるだけ避け、濃密な火力網を敷きながら全戦線にわたつて着実に前進、包囲網をせばめていくという正攻法をかたく守っていた。そのため、日本軍の夜襲はほとんど効果はなく、また八原の説く持久作戦の堅持も、実際には米軍の火力の前に身動きできなかった結果でもあつた。長の言う「運命の打開」とは、そうした八方ふさがりの状態を打ち破りたいという、深刻な焦り以外の何ものでもなかつた。この総攻撃計画も、結局、中止となる。

嘉数高地かすかの戦闘をはじめ、各地域で米軍との間に激しい戦闘が繰り返されてはいたが、それらは各部隊の個別的戦闘に終始したもので、戦局を動かすようなものではなかった。持久作戦によって米軍の沖縄占領を遅らせるという、ただ一つ日本に残された作戦も、長参謀長が主張した、現実を無視し、精神主義を基調とする夜襲攻撃によって、敗北を加速するだけであった。その点で長は、日本軍の伝統的な用兵思想に見られる精神主義の忠実な実行者ともいえた。

※徹底した住民無視

沖縄戦の最大の犠牲者は、沖縄住民であった。日本軍は劣勢を補完するため、老若男女を問わず大多数の沖縄住民を戦場に根こそぎ動員した。「軍民一体化」の美名のもとに実施された、この強制動員の結果、必要以上の沖縄住民を戦闘に巻き込むこととなり、被害を大きくすることになる。

さらに、沖縄本島南部に数多くある鍾乳洞（沖縄本島南部はサンゴ石灰岩よりなる）に立てこもって戦う持久作戦を採用したことから、すでに洞窟に非難していた住民を洞窟から追い出したり、米軍の発見を恐れて洞窟内の住民を殺害する事件も頻発することになった。

それだけではない。沖縄の日本軍は、軍民混在の状況のなかで部隊所在地の漏洩ろうえいに神経

をとがらせた。当初から、全住民を飛行場建設や陣地づくりに徹底動員しておきながら、軍の沖縄住民に対する信頼感は希薄であった。日本軍は、同じ日本国民でありながら沖縄住民を異端視し、「スパイ」視する傾向が強かった。戦局が日本軍に不利になるにつれ、その傾向は一段と強まり、単純な思い込みや猜疑心から、沖縄住民を「スパイ」として殺害する事件も各地で発生する。

これらは結局、第三二軍だけでなく日本軍全体に共通する、住民の生命・財産への無視と、さらに強制動員と住民排除とを同時的に実施しようとした矛盾から生じたものであった。そうした日本軍のホンネを、長は次のようにストレートに語っている。米軍上陸以前に行なわれた新聞記者のインタビューでの長のことばである。

「一般県民が餓死するから食料をくれといったって、軍はこれに応ずるわけにはいかぬ。軍は戦争に勝つ重大な任務遂行こそが使命であり、県民の生活を救うがために、負けることは許されない」（『沖縄新報』一九四五年一月二七日付）。

日本軍の戦場での勝利のみが目的であって、その目的を達成するためには、沖縄住民の犠牲は当然と言わんばかりの発言である。この長の対住民姿勢は、戦況が悪化するにつれていっそう助長され、沖縄住民への軍事的統制を強化するなかで、「軍人軍属を問わず標準語以外の使用を禁ず（沖縄語で談話しあるものは間諜と見做し処分す）」（『第三二軍司令

部 日々命令綴」とした通牒を長参謀長の名で発するまでにいたる。

沖繩住民に沖繩語を話すなどという通牒は、沖繩文化への冒瀆であり、差別以外のなにものでもなかった。この通牒が、日本軍に沖繩住民への過剰な警戒心を抱かせ、スパイの名による殺害事件の大きな原因となったことは明らかであり、その責任はあまりにも重い。

※怪異な軍人像

米軍の攻勢の前に後退をつづけた第三二軍司令部は、沖繩本島南端の摩文仁まぶにの洞窟で最後の持久戦を試みることになった。しかし、この時点ではすでに軍組織は壊滅状態であり、残存部隊の掌握もほとんど不可能となっていた。したがって、持久戦といっても、ひたすら、米軍との接触を避け、洞窟内に潜伏するしかないのが実態であった。

軍の崩壊が間近に迫り、摩文仁に後退する過程で生じた問題の一つに、多数の重傷者の後送問題があった。米軍の攻勢速度がはやまり、收容能力や治療施設の不備も手伝って、結局、長参謀長の「各々日本軍人として辱しからざる如く善処すべし」（八原前掲書）との指示にしたがい、重傷者には自決が強要された。八原の記録によれば、長は摩文仁の洞窟内でもあいかかわらずこれまでのように連夜酒宴を開き、女性をかたわらにおいて気焰をあげていたという。

しかし、米軍が洞窟への攻撃を開始するや、長は牛島軍司令官とともに自決を決意する。長は、自決にのぞんで自分のワイシャツの背に「義勇奉公 忠則尽命」と書き、八原に向かつて「八原！ 後学のため予の最後を見よ！」と叫んだという（同前）。こうして、長は最後まで「生きて虜囚の辱めを受けず」の『戦陣訓』の精神を忠実に守ったことになる。

しかし、多数の住民が摩文仁付近に避難し、戦闘状態が依然つづくなかで、住民も含め米軍への投降を厳しく禁じたまま、混乱状態を收拾できる唯一の責任者としての役割を放棄して自決してしまったその行動は、近代人の常識からすれば無責任としかいいようがない。

事実、司令官名で、残存部隊に向けて「最後迄敢闘し悠久の大義に生くべし」とする軍命令を発していたため、軍首脳を失った残存部隊は、戦闘を收拾する能力を欠いたまま、無秩序状態のなかで絶望的な戦闘を余儀なくされ、それは日本降伏の八月一五日をこえて、九月、一〇月までつづくのである。

その結果として、当時沖縄県の総人口約六〇万人のうち実に四分の一に相当する約一五万人が戦争の犠牲となった。この数は、正規の日本軍兵士の戦死者数をしのぎ、沖縄戦が「軍民一体化」の名のもとに、まさに住民犠牲の上に戦われた戦争であったことを示して

いる。

帝国陸軍軍人・長勇は、軍内部にあっては一青年将校の身分で内閣要人の殺害計画を練り、他国の国民に対しては血刀をひっさげて殺戮を呼号し、沖繩戦においては自国民を正規部隊の盾として激戦の場にさらしつづけ、その多くの犠牲を平然として黙殺してきた。そして彼は、多くの犠牲を出したことへの責任を感じることなく、ただ日本帝国軍人としての誇りと軍人精神の発揚として、依然として戦闘がつづく最中にさっさと自決してしまふ。その自決にさいして、「予の最後を見よ！」と英雄然と叫んで見せた長勇の姿は、怪異そのものに見える。

しかし、この怪異な軍人は、決して突然変異のごとく現われたわけではない。彼もまた、日清戦争以後、他国への侵略によってしか発展するすべを知らなかった天皇制国家にあって、その侵略政策の文字通り「尖兵」としての役割をにない、同時に政治・経済領域にまで絶大な発言力を持った日本帝国陸軍が生みだした軍人の一人に過ぎない。ただ、長は、日本陸軍の体質を最もストレートに發揮した代表的な軍人であったのだ。

それゆえ、ファシズムと戦争の時代を二度と繰り返さないためにはその主役となった日本陸軍、その陸軍の体質を最も集中的に体現した長勇という軍人のとった行動を、事実にくしくしてしっかりと見ておきたいと思うのである。